

2014年3月21日

3月21日、春分の日だ。まさに表題のとおり、春とは名ばかり、雪解けの道に容赦のないきびしい寒さの強風が吹き付けてくる。しかし春は確実に近づいている。雪の下でも新しい芽生えが息づいている。

昨日は福島県から釧路に避難している男性から、ビバハウス便り NO.94「超高齢化社会への一石〜“年寄り元気村”」構想に共鳴し、村建設のための「建設ボランティア」に応募したいとのメールが入った。村が実際にスタートした後に、お年寄りの皆さんのためにさまざまな分野でボランティアをして下さるとのお申し出は、先に書いたように10名を下らないが、「建設」そのものへの協力ボランティアは今回が初めてだ。まさにこの構想は、現在の日本社会に求められているものであることを改めて実感させられた。

夕方になって、うれしい知らせが突然飛び込んできた。福井県から数年前にビバに来ていた S 君が、「今大学の卒業式から自宅に帰りました」との知らせである。S 君は小学生時代から不登校になり自宅から出られなくなって、家庭内暴力にも苦しみ、ビバハウスにたどり着いた青年であった。素直で人なつきの良い若者で当時酪農学園大学を卒業した二人の「大卒特別ボランティア」とも信頼関係が生まれ、めきめき明るく、活動的になった。

2005年の夏には、私達はビバハウスの活動に強い関心をもたれた方のご招待を受け、カナダで若者支援に取り組んでいる皆さんとの交流をしてきた。カナダ現地の皆さんが、ビバからの若者を喜んで受け入れてくださるとのご好意を受けたので、思い切って S 君に打診したところ、「是非行って見たい」との勇氣ある答えが返ってきた。1週間のカナダ生活は彼に生きていくうえでの大きな自信を与えてくれた。ホームステイ先のおばあちゃんに最後の日に「サンキュー グットバイ！」といえたと笑顔で語ってくれた S 君だった。

今取り組んでいる就活が一段落したら、ビバにこの間の自分の生活を報告に行きたいとの事であった。若者支援を14年間継続しなければ絶対に味わえない喜びを今実感している。

さらに最近ビバの様な活動は、どうしても長い時間との戦いであることを体験させられた出来事が起こった。青森県御所が原に住む母子から、5年ほど前に1週間試験入所でビバに滞在した25歳の息子さんが、このまま自宅にこもっていても、どうにも成らないという事で、再度ビバへの長期の入所を希望してきたのだ。切実な母親の願いに応じて、彼の再挑戦に応えることにした。

それにしても、二人の（後期）高齢者の健康はいつまで持つのだろうか！？

